

# 「島ぐるみ闘争」は 誰が目指す〈あま世〉への道 どう準備されたか

森 宣雄・鳥山 淳 編著



「島ぐるみ闘争」は  
 どう準備されたか

沖繩が目指す  
 〈あま世〉への道

森 宣雄  
 鳥山 淳 編著

国場幸太郎  
 新川 明  
 林 京子  
 由井晶子  
 新崎盛暉  
 加藤哲郎  
 長元朝浩  
 富山一郎

9784835075457

ISBN978-4-8350-7545-7

C0021 ¥1800E

1920021018008

定価(本体1,800円+税)

不二出版

本書の内容

第I部 「オール沖縄」平和・自治運動の起源(森 宣雄)  
 第一章 沖縄平和・自治要求運動のかつて・いま・これから  
 第二章 「島ぐるみ闘争」はどう準備されたか——島人・農民・母たちと革命家

第II部 沖縄の人びとの歩み——戦世から占領下のくらしと抵抗  
 国場幸太郎 著(森 宣雄 編)

- 一 世界大恐慌下のとある家族
- 二 軍国主義下の少年たち
- 三 敗戦のなかの高校生とその家族
- 四 占領下日本のなかの沖縄の人びと
- 五 アメリカ軍政下の沖縄へ
- 六 革新統一勢力の前進と反共弾圧
- 七 土地と命とくらしを守るたたかい
- 八 CICとの対決——拉致と拷問
- 九 アメリカ軍占領支配への総反撃

編集後記(森 宣雄)

補論(鳥山 淳)

第III部 人との出会い 伝え継ぐこと  
 生きる——夫・林義巳のこと(林 京子)  
 オンリー・イェスタデイ——一九五〇年代沖縄と国場幸太郎(長元朝浩)  
 東京沖縄学生と国場幸太郎さん(由井晶子)

いわゆる「国場事件」をめぐる(新川 明)

国場幸太郎さんのこと——「封印」が解かれるまで(新崎盛暉)

明晰な人——国場幸太郎の帝国主義論(富山一郎)

民衆の飢えと哀しみのなかを歩んだ人——国場幸太郎さんと松田清さん(森 宣雄)

金澤幸雄さんと金澤資料について(加藤哲郎)

# 金澤幸雄さんと金澤資料について

加藤哲郎

本資料集『戦後初期沖縄解放運動資料集』全三巻を編むにいたった直接の契機は、編者となった加藤哲郎・国場幸太郎・森宣雄・鳥山淳の四名が、加藤の得た情報をもとに、二〇〇〇年夏に福島県須賀川市の金澤幸雄さん宅を訪問し、同氏所蔵の沖縄非合法共産党関係資料を閲覧し、複写する機会を得たことであった。

東ドイツ・モスクワ・中国体験を持つジャーナリストで外向的な金澤さんと、戦後沖縄体験に即して一語一語を大切にされる国場さんは、一見対照的に見えたが、内に秘めた闘志と冷戦期アメリカ世界支配の最前線で抵抗してきた共通体験で、お二人はすぐに意気投合した。本資料集の初版書籍版が刊行された頃、ほぼ同年輩の金澤さんも国場さんも、お元気だった。その資料提供者金澤幸雄さんは二〇〇七年一月二八日に、国場幸太郎さんは翌二〇〇八年八月二三日に、相次いで天界へと旅立たれた。新たに刊行される本デジタルDVD版は、おそらく天界で議論が続いているであろう、お二人に捧げられる。

デジタル人間の私は、一九九七年の丸山眞男一周忌から個人ホームページ「加藤哲郎のネチズンカレッジ」を開設し、手紙もデジタルで書き保存するようにしている。本稿を書くため、ハードディスクの中を捜した。ところが驚き、がっくりきた。いくつかのファイルが、古いヴァージョンのワープロソフトで作ったためか、奇妙な記号と数字の羅列で全く開かない。わずかに単純なテキストファイルで保存していたいくつかの金澤幸雄さん宛

て手紙が、判読可能なかたちで残されていた。そこから、金澤さんとの出会いと、金澤資料からの沖縄非合法共産党資料発掘の事情がわかってきた。

記憶とはいい加減なものである。てっきり元共同通信外部部で復帰前に日本メディアで初めて沖縄特派員となつた横堀洋一さんの紹介で金澤さんと会ったと思っていたのだが、沖縄関係ではなく、当時私が進めていたドイツ研究の聞き取りだった。後に『ワイマール期ベルリンの日本人——洋行知識人の反帝ネットワーク』（岩波書店、二〇〇八年）にまとめることになる「ベルリン反帝グループ」の一人、映画監督岡田桑三（俳優山内光）の取材で、岡田のご子息岡田一男さんの紹介だった。以下に、本資料集の成立に関わる当時の私の金澤幸雄さん宛手紙を（純私信を除いて）再現し、記憶ではなく記録として残しておくことにする。

金澤 幸雄 様

一九九九年二月二九日

前略。過日は、岡田一男様のご紹介で初めてお目にかかることができ、数々の貴重なお話をうかがったうえに、ご馳走にまでなつて、大変有り難うございました。心より感謝申し上げます。

あの日は、私の国崎定洞・ベルリン反帝グループ研究の一環である岡田桑三についてのお話に限定させていただきました。私自身の専門研究領域の一つはコミンテルン史であり、日本共産党史もその一部に含まれているため、金澤さんの数々の証言は実に貴重で、重要なものが含まれておりました。宮本綱領小委員会の話や、「赤旗」DDR特派員時代のお話は、近く須賀川まで出かける機会をつくって、改めて詳しくお聞きしたいと思っております。私自身が同封のような経歴で、『日本共産党の七十年』では丸山眞男と共に名指しで批判される「榮譽」を担っておりますので、文革初期の金澤さん除名の経過なども、他人事でなく記録に残しておきたいと思えます。

さて本日は、いくつもあるお聞きしたいことの中で、特に高安重正の沖縄共産党関係資料についての問い

合わせです。先日のお話では、五〇年問題で高安が地下に潜るときに、資料を金澤さんに預けていったというのですが、それら資料は、今でも金澤さんのお手元に残っているのでしょうか？ またその中に、非法沖繩共産党ガリ版刷り旬刊機関紙『民族の自由と独立のために』（一九五三―五五年頃、約一〇号発刊）は、入っていませんか？

実は、同封図書新聞「二〇〇〇年一月一日付、渡部富哉編『生還者の証言——伊藤律書簡集』書評にあるように、沖繩の活動家・地方史家の何人かと一緒に、沖繩・奄美共産党の歴史を調べています。沖繩の友人たちは、高安重正『沖繩奄美返還運動史（上）』（一九七五年、非売品）や松田清『奄美社会運動史』（JCA出版、一九七九年）を手がかりに、戦後沖繩社会運動史を再検討し始め、『民族の自由と独立のために』復刻を計画しています。ところが沖繩現地でも、非合法地下活動であった同紙はきわめて貴重な資料で、創刊号を含む何号分かが、未だに見つかっておりません。自治体公式機関である沖繩県史資料室でも八方手を尽くして探しておりませんが、欠号があります。

私は、新年一月六日から沖繩に再調査に出かけるため、友人たちに先日の金澤さんの高安資料の話や電話でしたところ、沖繩民衆の歴史を記録に残すために、ぜひとも高安氏の資料を見せてほしいということですが、もちろん私自身も、強い関心があります。そこでご面倒とは思いますが、高安資料がお手元にあるかどうか、あるとすればどんなものが入っているか、現物が無い場合はご記憶の限りでも結構ですから、ぜひともお聞きしたいと思います。

まずは御礼に、早めの年賀を兼ねさせていただいたうえ、あつかましくも、質問させていただきます。今後とも、よろしくお願い申し上げます。草々。

一橋大学社会学部（政治学） 加藤 哲郎

そのすぐ後、年末に金澤さんから電話があったらしい。メモが残されている。

「メモ 一九九九年」一二月三〇日夕、金澤さんから電話

1. 高安文書はあった。しかし「党の財産」なので、加藤にみてもらったうえでどのようにするか決めたい。
2. 高安文書のなかに『民族の自由と独立のために』は入っていない。しかし、沖繩共産党十年の総括文書、奄美共産党総括文書、国場幸太郎闘争報告書等が入っている。
3. 渡部富哉氏ら徳田「球二」全集刊行会、伊藤律の会の人達には見せたくない。しかし沖繩共産党が宮本党史から抹殺されているとすれば、由々しいことなので、なんらかの形で有意義に使ってもらいたい。
4. 加藤が沖繩で従来史料の所在を調査してきたうえで、須賀川で現物をみたらうえでどうするか考えよう。

つまり金澤幸雄さんは、高安文書を「党の財産」と考えていた。ここでの「党」とは、現実の日本共産党や復帰前の沖繩人民党ではない。金澤さんの信じる「あるべき党」である。金澤さんは、早稲田大学在学中から日本共産党の活動家で、朝鮮戦争から六全協（第六回全国協議会）の党分裂時に、徳田球一書記長らのいわゆる「所感派」に属していた。六全協後は党本部専従勤務員として、いわゆる「六一年綱領」作成にたずさわった（綱領小委員会の事務局）。中国文化大革命のころ、日本共産党と中国共産党の対立の中で、当時党機関紙『赤旗』の東ベリン特派員だった金澤さんは、北京やモスクワなどの在外黨員たちにも働きかけて文革・毛沢東思想を支持し、日本本土の共産党指導部を「現代修正主義」と批判したため、「分派」として党から追放された。この頃の金澤さんの著書は、『宮本顕治裏切りの三四年』（人民双書、一九六七年）と題されている。

その後も中国共産党との関係は緊密で、毛沢東を「毛さん」と呼び、国慶節に毛沢東と一緒に天安門にのぼったり、日本で「あるべき党」を作ろうとしたりしたようだが、ソ連崩壊後の世紀末にはどの政治党派にも属して



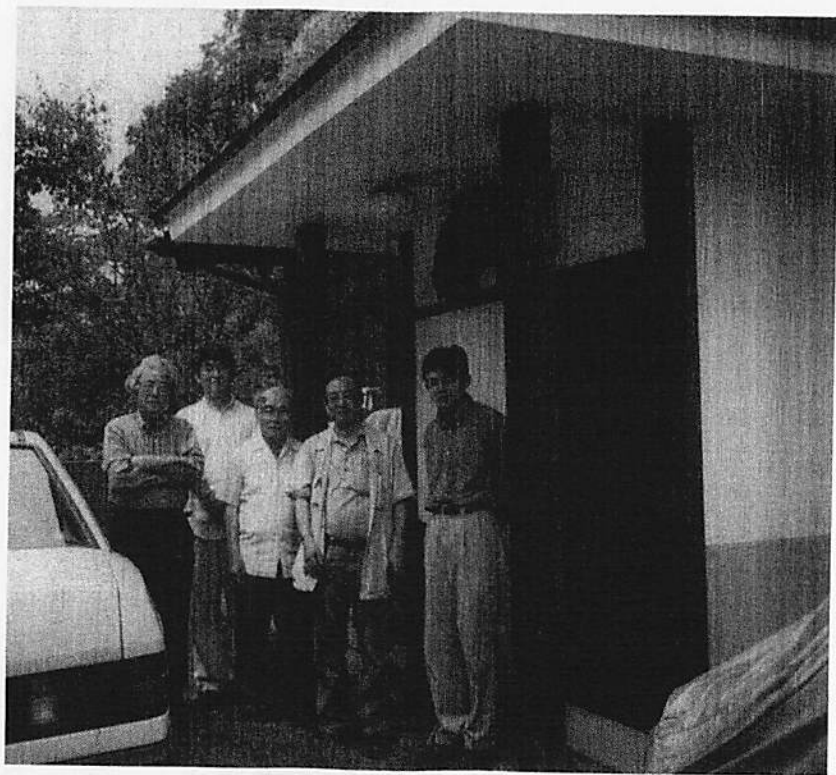
いなかった。山口県を中心とした日本共産党（左派）や渡部富哉氏らの徳田球一全集刊行会にも距離をおき、いわば「独立共産主義者」として歴史研究に沈潜していた。生活の糧は、同志であり医師である夫人の病院の事務長をつとめ、須賀川と東京とのあいだを往復していた。

私も金澤さんから一〇年ほど遅れて、一九七二―七三年に東ドイツ・ベルリンに滞在した経験があり、東京での研究会などで顔をあわせたことはあったが、親しく話をしたのは高安文書収集が初めてだった。話してみる、「毛沢東思想の闘士」というよりも、現代史に鋭い洞察力を持つ在野の知識人だった。レッドパージされたジャーナリスト（日本ジャーナリスト会議）とのつながりで、高安重正が金澤さんを信頼し、非合法共産党資料を預けた事情も了解できた。

その後も手紙・電話を重ねた後、二〇〇〇年一月末に須賀川に泊まり込みで出かけ、「国場幸太郎報告書（茶封筒入り手記）」ほか「金澤幸雄氏所蔵沖繩共産党関係文書（一九五二―五七）二〇〇〇年一月二九日」という資料リストを作り、これが本資料集第二巻のもとになっている。須賀川の由緒ある金澤家の書庫は、天皇制から各国共産党文書まで、膨大な蔵書と資料でいっぱいだった。貴重な第一次史料は、別棟の土蔵に漆塗りの文箱に入れて大切に保存されていた。沖繩非合法共産党関係は高安資料の一部であった。他の一部は牧瀬恒二氏に渡り、一九九七年に那覇市歴史資料室に収められたことを後に知った。

これら資料の解説のために、もともと戦後初期沖繩の政治史を探究してきた森宣雄・鳥山淳が周辺資料を集め、運動当事者であった国場幸太郎さんの保存資料と記憶をもとに、奄美の解放運動を長く探求してきた松田清氏、奄美と沖繩の解放運動を結びつけた林義巳氏らにインタビューを重ね、当時の沖繩の活動家であった渡慶次正一氏、大峰林一氏からも資料と情報の提供を受けて、本資料集のようなかたちまでにまで拡充し、系統立てることができた。

私がその後、米国の戦後アジア戦略と日本占領政策について金澤さんに資料をお借りし東京でお会いしたさい、



福島県須賀川市にあつまった資料集メンバー  
（左から金澤幸雄、森宣雄、国場幸太郎、加藤哲郎、鳥山淳 2000年8月）

金澤さんが強く勧めたのは、近衛文麿を徹底的に研究すること、『矢部貞治日記』全四巻を年表と照らし合わせてじっくり読むことだった。ようやく『矢部日記』の二巻目に入ったところで、金澤さんは世を去った。

本資料集は、金澤幸雄さんと国場幸太郎さんの、第一次史料を通じて沖繩民衆の歴史を後世に伝えるための、執念の協働の産物である。

本書は、長年月にわたる多くの人の出会いの産物として形になった。あとがきでは、本書のなりたちを記録にとどめ、またその過程であらわれていった本書の関係性の思想と、書名について解説を加えておきたい。

本書は、加藤哲郎・森宜雄・鳥山淳・国場幸太郎編『戦後初期沖縄解放運動資料集』（全三巻、不二出版、二〇〇四—〇五年）のDVD版再刊の別冊である。資料集の編纂経過については第Ⅲ部の諸論稿でも述べられているが、まずこれから整理してゆこう（なお、以下に本書の掲載箇所を示す際には頁数のみ記す）。

ことの起りは二〇〇〇年はじめ、加藤哲郎さんと金澤幸雄さんが「沖縄・奄美非合法共産党関係資料」四七点の存在を確認し、共同調査研究の開始で合意したことにはじまる「二六二頁」。その資料のなかには、解説を要する暗号文の秘密報告書や、同党書記だった国場幸太郎さんの自筆報告書などが含まれていた。

一方、国場さんは一九九五年一月に小冊子『回想—私の沖縄経験から—』をまとめ、同年四月には、長元朝浩さんの取材執筆になる初の評伝「クニさん」が『沖縄タイムス』で連載され、歴史の「封印」を解きはじめていた「二四・二四一頁」。そして新川明・岡本恵徳・上岡常道さんのすすめをうけて、一九九八年から回想録の執筆にとりかかり「一九七頁」、九九年五月には新崎さんのはからいで大阪に講演にこられ、あわせて森・鳥山・富山一郎さんらによるインタビューに応じ、綿密なインタビュー記録の作成にとりくむようになった。ちょうどそのとき、「沖縄・奄美非合法共産党関係資料」発見のしらせが鳥山の「一橋大学での指導教官であった加藤さん」から届いたのであった。

二〇〇〇年八月、加藤・国場・鳥山・森は福島県須賀川市のご自宅に金澤さんを訪ね、調査を本格化させた。また前後して同年七月には、奄美共産党についてくわしい松田清さんへのインタビューを加藤さんと森でおこなひ、松田さんが保管しておられた林義巳さんへのインタビュー・テープをお借りして記録に起こした。翌二〇〇一年には国場・鳥山・森で、奄美大島に林義巳さんを訪ね、林さん所蔵の資料と手記を林京子さんの力添えで整理・複写させていただくことができた。

こうして資料集の核となる「沖縄・奄美非合法共産党関係資料」はあいついで発掘され、二〇〇一年一月には「占領下、沖縄・奄美の非合法抵抗運動について」と題したシンポジウムが「アソシエ21」の方がたのご尽力で、東京の専修大学で開催された。シンポジウムでは、加藤・金澤・国場・森・鳥山・大峰林一・松田清の計七人が講演と発表をおこない、資料発掘の記者発表もおこなった。大峰さんは沖縄非合法共産党の当事者でもあり、ながく同党の実態解明に独自の立場でとりくんでこられ、資料集編纂にも協力いただいた。

そして資料集は二〇〇四—〇五年に刊行されたが、わずか五年で売り切れになった。その間、二〇〇四年に林義巳さん、二〇〇七年に金澤幸雄さん、二〇〇八年に国場幸太郎さん、二〇一二年に松田清さんが亡くなった。

資料集編纂にふかく関わったメンバーで五〇年代の当時を知る者はいなくなり、二〇一三年三月、松田さんの追悼会が奄美大島でおこなわれ、残された者たちが資料集に関してなすべきことは終わったかにみえた。ちょうどそのころ、版元の不二出版の編集者、小林淳子さんからDVD復刊と続編の刊行を熱心にすすめる声かけを何度もいただいた。

続編の資料集は、五〇年代後半以降の沖縄の地下抵抗運動の展開や、米軍が沖縄の政情を調査した秘密資料などをまとめる構想で、数年前から森は不二出版と相談してきたが、現在進行形の「オール沖縄」の平和・自治要求運動のゆくえや七〇年代の調査に追われ、なかなか進展しなかった。だが五〇年代の経験について、現在の沖縄をめぐる状況と照らしあわせながら読みやすいかたちで提供する必要は、むしろかつてなく増しており、松田



さん追悼会で鳥山と森が再会し、積年の課題である国場さんの遺稿の整理をあらためて検討したことなど、もちろんが重なり、DVD版再刊にあわせた別冊の編集にとりくむこととなった。国場さんの遺稿を中軸にすえて前後を関係者でかためるような形で、故人となられた四名の方がたが属する、民衆の飢えと哀しみの共有から生まれる歴史「一九・二五七頁」を、現在の沖縄―日本―世界の状況のなかに浮かび上がらせる構想だった。

六月に本書の企画はスタートし、国場さんの五回忌となる八月末の原稿しめきりを目標にして急ピッチで作業をすすめた。核となる国場さんの遺稿は森が編集、鳥山が補足解説して、独立した作品として第Ⅱ部に収めた。それを現在の状況や未来への展望にむけて歴史的に位置づける前座として、第Ⅰ部は森の単著用の旧稿・新稿を活用してまとめ、あとは第Ⅲ部の追悼文集による視点のひろがり・豊富化を期して待った。第Ⅲ部の寄稿メンバーにはだいたい無理をお願いしたが、林・金澤・国場・松田の各氏の遺徳のゆえであろう、原稿はみごとにそろっていた。

第Ⅲ部では、各人各様の視点と生き方がそれぞれのスタイルで示される一方、それが具体的な人と人とのつながり、折り重なりをおしてひとつに織りなされ、結果として、時代と世代、沖縄―奄美―日本（関西・関東・東北）の土地と文化（民族性）の相違を踏まえつつ境界には縁どられない、ひろい自由な社会性が一書のなかにあらわれ出てきたように思う。そこで踏みこえられてゆく境界のひとつは、物故者たちとのあいだの幽明の境でもある。歴史をあらわす行為とは、人間に時空をこえて生きるいのちのありようを感受させる。ユダヤ人哲学者エマニュエル・レヴィナスの『全体性と無限』（岩波文庫、下巻、二六一・二七一頁）に、具体的な存在・受肉から出発して存在の孤絶を踏みこえてゆく、多元性の整序されない共在こそが平和というものの本質だという考え方が記されているが、それに通じるものがあるかと思う。

ともあれ、こうして一書のうちにひとつの社会があらわれ出てゆき、真夏の昼夜、作業は完成にむかって着実に進んでいった。だが、そのなかで逆に大きくせり上がってくる難問があった。書名の問題である。

\* \* \*

本書は「島ぐるみ闘争」を地下から準備した国場幸太郎さんと、その同志たちのはたらき、出会いを中心とした本である。かれらが農民・労働者・母親たちの苦境のもとにかけより、たがいに触発しあい助けあうなかに「島ぐるみ」の大衆的抵抗運動は切りひらかれた。ところが、その中心人物の国場さんを前面に立てた書名が思いつかないのである。したがってどの書名候補もしっくりこない。

その理由は、たぶんこういうことなのだろう――

国場さんはつねにどこでも謙虚であり、じぶん一人が目立つことがないよう、小柄で色白なからだを活かして、こやかにスッと身を退かれる。そして一歩さがって寄りそわれ、ときに励ましや助言をはさみ、提案しみんなに呼びかけると、またさがる。第Ⅲ部で由井晶子さんが描き出しているように、学生時代からそうだったのだろう【二二頁】。

インタビュアーやその後のやりとりで国場さんの語りに接した編者は、「これは国場さんがやったのでしょ」と歴史的に大きな意味をもった活動の確認を求めることが、たびたびあった。しかし国場さんは「若い者が中心になってやった」とか「僕がしていたというより……」とかわして、他の人たちや全体を立てるのである。事実の客観的な経過や主導者の認定をしたい歴史研究者としては何度も歯がゆい思いをした。資料をつぎあわせていくと中心人物は国場さんにまちがいなく、ことばを換え、誘いをかけ、理づめで押す――そうしてくり返し当たっても、党全体と同志を立てじぶん個人の功績となるものを消してゆく国場さんの姿勢はゆるがなかった。いまから思えば、「鉄の団結」「鋼の意志」といわれるような毅然たる活動家・革命家の姿に、知らず知らず肌で接していたのだろう。

そのような姿勢は遺稿にもつらぬかれており、いきおい編者・歴史研究者のがわも国場さんを前面に立てた書き方、まとめ方ができなくなる。もし無理に立てようとすると、国場さんの意志にそむくことにもなり、そもそ

も国場さんが実際に指導していた運動の実像・思想性から外れた書き物をデッチあげることになってしまふ。じつにかしこく、意志と身ぶりと思いが、ひとつに溶けあつた人物であつた。

このようないで、影の指導者国場さんは白い影のままでありつづけ、米軍のみならず歴史家たちからの追及をかわし、結果として、声なき民が地の塩・世の光となる歴史像を無言のうちに地上にあらしめてゆくのである。国場さんは最後まで——「冷凍保存」され記念館に納まつてゆく指導者たちのような個人崇拜をその死後においても断じてゆるさない——比類ない永遠の「民衆革命」家であつた。

さて問題は書名である。いったん編者は、その立場上、編者がわで国場さんを代弁するよりほかないかと覚悟して、「島ぐるみ」平和運動や「オール沖縄」など、現在の沖縄の一般読者になじみやすいことをキーワードにえらんで仮題を立ててみた。一般の方がたに届きやすくすることは国場さんの願いでもあつたからだ。しかしどうすればそれができるのか、研究をこととする編者にそのセンスはとほしかった。この点、長年『沖縄タイムス』で社説を練って論陣を張つてこられた長元朝浩さんにかなうものはないと考え、長元さんに相談すると、新川明さんと新崎盛暉さんという国場さんの親友二人に手助けいただき、本書の成立により深くコミットいただくのが最善だとアドバイスいただいた。そこでお二人に意見を求めると、新川さんから「国場幸太郎の志しや目指したものを反映するべきだ」と指摘いただいた。

たしかにそのとおりなので、これ幸いと、本書のコンセプトをあらためて説明して書名についてお知恵をお願いする依頼文を、九月一日にお二人に送つた。編集部からは原稿をあらかた急送し、お目通しをねがつた。

すると新崎さんは、編者に任すといいながらも、「国場さんは政治的には統一戦線派」だと指摘され、それを現在の人につたわることばでいうなら「島ぐるみ闘争」しかないと落ち着き、候補のなかから『島ぐるみ闘争』はどう準備されたか』がメインタイトルに決定した。

だがそうなるともっと難問になるのは副題のほうで、国場さんのなかには、沖縄における統一戦線・団結をめ

ざす政治的な要素のほかに、それを世界につなげてゆく〈ひろがり〉、そしてそれらを追求するなかでの作風や思想として、貧しい人びとのあいだの思いやりや、自由で率直な精神を大事にする〈こころ〉、この三つの要素がトータルな解放としてつながつていた。

沖縄の〈島ぐるみ〉+世界への〈ひろがり〉+民衆の自由な〈こころ〉——このゆたかな世界像を、書名に使えるわずかな文字数で表現するのは、ほとんど不可能に思えた。

ただ、第Ⅲ部の富山一郎さんの原稿「二四六頁」を読んで、すぐれた帝国主義論の研究者でもある国場さんをあらわすことばとして、伊波普猷が絶筆で残した〈あま世〉は使えるかもしれないと、キーワードの有力候補に加えた。伊波を主役にした研究書『暴力の予感』をもち、同時に世界最前線の帝国主義研究者でもある富山さんを、十数年前に国場さんへのインタビューにお誘いしておいてほんとに助かつた（あの日、富山さんは持病のお腹をこわしておられ、後日、国場さんからはそのことを心配するお手紙をいただいていた）。

依頼から三日後の朝九時、新川さんからFAXがとどき、そこには思案をかさねたうえで「提示の案を生かしつつ私案を一つだけ。『沖縄が目指す〈あま世〉への道』と書かれてあつた。本書の名まえはこれにまちがひなかつた。

さすがは詩人、沖縄戦後史を象徴する思想家である。見ちがえるように映え、国場さんのゆたかな世界を照らしていただいていた。

しかも主題のキーワード「島ぐるみ闘争」は、周知のように沖縄現代史研究の第一人者・新崎盛暉さんが用いて定着させたことばである。国場さんを中心にした本の書名に、国場さんの沖縄解放闘争の同志であり親友であるお二人のことばが並ぶというのは、まさに壮観である。国場さんも快心の笑みをうかべているだろう。

国場さんを中心としながら国場さんが前面に立つことのない本書の名まえは、こうして友愛にかこまれる形であたえられた。

このあと編者に残された最後の仕事は、国場さんにとっての〈あま世〉をことばであらわす解説文であった。表題に〈あま世〉といううちなぐちを、外見上それとは異質な「島ぐるみ闘争」ということばと並べてかかげるのだから、巻頭でその意味するところを説明しておく必要があった。

一面からみれば、国場さんと〈あま世〉の理想世界は結びついてこないかもしれない。かれは慎重にことばをえらび、観念的空想的な言辞を決して口にしなかった。しかし国場さんは、地上にひろがる人間世界が、家族愛や友情、そして貧困・搾取・差別に苦しめられている民衆のあいだの思いやりと助けあいによって支えられ、成り立っていることを深く体得していた。そうした「国場さんらしさ」は、第Ⅱ部の回想録「沖繩の人びとの歩み——戦世から占領下のくらしと抵抗」を読むことで、あたたかい家族のもとで幼少期から育まれたものであり、また、成長してからのどんな逆境に直面するなかでも貫かれていたことがわかる。

その最大の見せ場は「CICとの対決」のなかでとおとずれている。突如拉致連行され、屈辱と暴力に包囲された拷問の暗闇のなかでも、途中で「バスを降りた友人」の安否を思いやる友情をたもち、その一方で、友人の身元をしつこく訊くCICの尋問内容から、友人とじぶん、そして尋問者たちが置かれている全体状況を適確に割り出し、突破口を切りひらいていった「二八五頁」。友情と明晰さは、一点の曇りもなく同居していた。国場さんにとって友情や家族愛は観念的なロマンではなく、逆境を生き抜くつよさと知恵のみなもとであった。

友愛の確信に支えられて微動だにしない、この国場さんの明晰さのゆえに、CICはいったん捕らえた仇敵を不起訴処分とするほかないところへと追いつめられ、主導権をにぎられて釈放へと誘いこまれていった。身ぐるみはがされ誰も知らない拷問施設に閉じこめられた二十代の青年が、たったひとり世界最強の軍隊の諜報部隊を打ち負かす——米軍が舌をまいた国場さんのつよさとはこのことを指している「二八・五八頁」。一見、庶民のひとりとしての位置から自分史を淡々と書き進め、時折そこに歴史分析を要所ではさんでいるかのような、本書

第Ⅱ部「沖繩の人びとの歩み」には、常人には容易に想像すらできないようなつよさをもった〈民衆革命〉の担い手の実像がえがかれている。

さて、この友愛の確信と明晰さの両脚の上に支えられているのが、第Ⅲ部で富山さんが喝破した〈あま世〉の未来を幻視するまなざしである。しかも国場さんが見える未来は地に足のついたそれであり、国場さんは歴史の予言ができる人だった。第Ⅰ部で述べたように、国場さんは「島ぐるみの土地闘争」のたち上がり、「総反撃」のシンボルとしての人民党の再起の二つを予言し、実現させてみせた「五六頁」。そして一九九四年に執筆し翌年一月にまとめた小冊子『回想』「二八一—二頁」では、九五年九月の少女レイプ事件以降の展開を、次のように予測してみせた。長くなるが紹介したい。

戦後沖繩の大衆運動は「重大な政治問題や人権問題等が起こると素早い反応を示して、その都度民衆のエネルギーを広く結集できる協議体がつくられる。それを繰り返しながら大衆運動は発展してきた。沖繩では、それが伝統的な運動形態になっている。」

これにたいして、いまの日本の政府は「日米軍事同盟を軸にした外交政策を堅持して、自衛隊は合憲であると言いつつ、「君が代」「日の丸」は「国歌」「国旗」であると言いつつ。共産党を除くすべての政党が政権与党化している現在、それが日本の政治の基本路線になっている。このような日本に「系列化」し、政権与党化した政治勢力や国会に沖繩の未来を託したならば、アメリカ軍基地との「共生・共存」を強いられるだけである。それは沖繩がベトナムや湾岸のような地域戦争におけるアメリカの出撃拠点であり続けることを意味し、非人道的な大量殺戮戦争を容認することにつながる。それは、日本で唯一地上戦を体験し、その悲惨さをよく知っている沖繩にとって、耐えられない苦しみであり、痛みでありつづけるにちがいない。この苦しみと痛みを払いのけるにはアメリカ軍基地の撤去以外にない。日本の既成の政治勢力が頼りにならないことが判明している今、沖繩は独自の立場に立ってその方途を具体的に採らなければならない事態に直面している。」



そして視線は日本の民衆のもとへと展開する。「曾って、アメリカの軍政下におかれていた沖縄の住民が日本復帰運動に立ち上がったとき、日本国民はそれに呼応して沖縄返還を要求する運動を全国的に展開した。そしてそこに結集された人民大衆の力は、日本政府を揺り動かし、アメリカ政府に迫って、沖縄の施政権を日本に返還させる原動力となった。そのエネルギーを再び呼び覚まし、結集することが望まれる時期は今をおいてない。」この将来への見とおしと提言は、みごとに現実の事態の展開を先読みしていた。そしてこの分析的記述のなかに挿みこむようにして、国場さんは、めずらしく心うちの夢を書き記している。

沖縄のアメリカ軍基地撤去は、超大国アメリカの軍事介入による地域戦争の危険を取り除いて、諸民族の独立・友好を促進し、世界の平和を確かなものにする世界的な課題に直接つながっている。沖縄がよくこの課題にこたえて、日本に対しても、世界に対しても、アメリカ軍沖縄基地撤去要求という平和のメッセージの発信基地になることを私は心ひそかに期待し、ねがっている。ベトナムや湾岸のような大量殺戮戦争がこの地球上でこれ以上行われることがないようにするために。

かつて「基地の島」オキナワは、そこから出撃した米軍機の猛爆撃によって日々殺戮と破壊にさらされるベトナムの人びとから「悪魔の島」と呼ばれていたという。それを世界平和の「発信基地」へと反転させ、「大量殺戮戦争がこの地球上でこれ以上行われることがないようにする」こと——それは分析や予測である以上に、こころがもとめる願いであった。帝国主義と地上戦の「にが世」を知るからこそ、夢みずにはいられない基地撤去の「あま世」。

国場さんにとっての「あま世」は、沖縄から基地をなくす「平和への復帰」が地球上から「にが世」をなくす世界平和につながってゆく未来であったに相違ない。

こうして巻頭の「はしがき——沖縄の歩んできた「あま世」への道」は完成し、いまその顛末を記す「あとがき」の筆をおくことで、本書の原稿はすべてそろった。

最後に、残された課題についてひとつだけ触れておく。

国場さんは「島ぐるみ闘争」を準備した地下革命党を「沖縄の党」と呼んでいる。「二四一頁」。日本共産党とはちがうという意味がこめられているが、そればかりではない。入党の申込書も党員証もなく、規約などで縛らない「非常に、共産党らしくないルーズな地下組織」「五八頁」——この実態からいえば、それは地上のあらゆる共産党ともちがっていた。さらにいえば、地域土着政党としての沖縄人民党とも、それは明確に区別されていた。沖縄から基地をなくす「あま世」が世界につながってゆく未来をめざす、人と人とのつながりあいこそが、おそらくこの国場さんの「沖縄の党」の本質だったのだろう。

ある人はこの党を、そのおほかさゆえ「とても沖縄的な組織」だと評していたが、たとえば『琉大文学』など、一定の呼応関係にあったグループの人びとは「沖縄の党」をどうとらえ、関係していたのか。多様性を大事にしたことも反映して、国場さんの見方とは若干ちがう像が浮かび上がるかもしれない。国場さんのはたらきを評価したうえで、かれがもっとも戒めていた人格化をふせぐためにも、より多くの視点から「沖縄の党」とその周辺、そして「民衆革命」の現在への軌跡をゆたかに描きだす課題は残されている。そうすることで、「あま世」への道が山脈のように高く低くつらなり、海をも越えてつながるグローバルな歴史像が、政党や指導者が割拠的に屹立する像にかわって結ばれてくるのではないかと思う。(以上、文責は森)

\* \* \*

本書が形になるうえで、林京子さん、謝花悦子さん、沖縄県公文書館の仲本和彦さん、株式会社Nanso.のみなさんに写真掲載でご尽力いただいた。第Ⅱ部の余白に掲載した焼き物は日本工芸会正会員の陶芸家、松島朝義さん作の「つちのきれはし」で、久保田美生さんに撮影・画像加工いただいた(この立体物について関心のある方

は、松島朝義陶展「余白の行方」にたいする詩人の矢口哲男さんの展評「土を解放するオブジェ」『沖繩タイムス』二〇一三年一月一日、コザのプラザハウス・ロージャースHP掲載記事<http://www.rogers1954.jp/movement/57>を参照されたい。組版・デザインについては冬三舎の内浦亨さん、そして本書全般について不二出版の小林淳子さんと前会長・相談役の船橋治さんにたいそうご尽力いただいた。

小林さんの情熱と、猛烈なまでのはたらきがなければ、本書は生まれなかった。また、資料集いろいろお世話いただいてきた船橋さんは、沖繩移住前の「私の仕事の集大成」として、本書の刊行を後押しいただいた。そして最後に、不二出版社長の細田哲史さんには、定価をすこしでも安くして、ふだんあまり本を読まないような方がたのもとへも本書を届きやすくしたいという編者の願いをご海容いただいた。

本書ができあがるまでご助力ご支援いただいたみなさまに心より感謝しつつ、林義巳、金澤幸雄、国場幸太郎、松田清の四氏の霊前に本書をささげ、結びとする。

二〇一三年九月一日

森 宣雄  
鳥山 淳

## 編著者紹介

森 宣雄 (もり よしお)

1968年横浜市生まれ。琉球大学・大阪大学の大学院をへて現在、聖トマス大学人間文化共生学部教員。博士(文学)。著書『地のなかの革命——沖縄戦後史における存在の解放』(現代企画室)、共編『現代沖縄の歴史経験』(青弓社)、論文『The Return to Ordinarity: An Introduction to the New Perspectives on the History of Postwar Okinawa,』『サビエンチア』第46号など。

鳥山 淳 (とりやま あつし)

1971年生まれ、神奈川県出身。一橋大学大学院社会学研究科博士課程修了。現在、沖縄国際大学総合文化学部教員、『けーし風』編集運営委員、博士(社会学)。著書に『沖縄/基地社会の起源と相克 1945-1956』(勁草書房、2013年)、『成長と冷戦への問い』(共著・大月書店、2011年)、『イモとハダシ——占領と現在』(共著・社会評論社、2009年)など。

## 「島ぐるみ闘争」はどう準備されたか ——沖縄が目指す〈あま世〉への道

『戦後初期沖縄解放運動資料集 DVD版』別冊

2013年10月10日 初版第一刷発行

定価(本体1,800円+税)

編著者——森 宣雄・鳥山 淳

著者——国場幸太郎・新川 明・林 京子・由井晶子・新崎盛暉・  
加藤哲郎・長元朝浩・富山一郎

発行者——細田哲史

発行所——不二出版株式会社

〒113-0023 東京都文京区向丘1-2-12  
電話 03-3812-4433 振替 00160-2-94084  
E-mail: administrator@fujishuppan.co.jp  
URL: http://www.fujishuppan.co.jp

組版——冬弓舎

装幀者——内浦 亨

印刷・製本所——モリモト印刷

©MORI Yoshio, TORIYAMA Atsushi 2013 Printed in Japan  
ISBN978-4-8350-7545-7

## 著者紹介 (生年順)

国場 幸太郎 (こくば こうたろう)

1927年那覇市生まれ。東京大学経済学部卒業。『沖縄の歩み』(牧書店、1973年)。2008年、宮崎県都城市で死去。享年81(くわしくは第II部扉裏参照)。

新川 明 (あらかわ あきら)

1931年沖縄に生まれる。55年琉球大学文理学部を中退し沖縄タイムス入社。同社八重山支局長、『新沖縄文学』『沖縄大百科事典』編集長、編集局長、社長、会長をへて95年退任。著書『反国家の凶区』、『新南島風土記』など。

林 京子 (はやし きょうこ)

1933年奄美市名瀬生まれ。49年、奄美高等女学校卒業。51年、法務局奄美支局勤務。58年(亡)林義巳と結婚、子ども3名。61年、司法書士開業、現在に至る。

由井 晶子 (ゆい あきこ)

1933年那覇市生まれ。フリーライター。1955年早大卒業。沖縄タイムス社東京支局入社、在勤40年。沖縄県史、那覇市史・同議会史編集。(財)沖縄協会金城芳子基金運営委員会事務局局長。著書『沖縄 アリは象に挑む』など。

新崎 盛暉 (あらさき もりてる)

1936年東京生まれ。主な著作は、『沖縄同時代史(全10巻、別巻1)』(凱風社)、『沖縄現代史 新版』(岩波新書)、『新崎盛暉が説く構造的沖縄差別』(高文研)など。

加藤 哲郎 (かとう てつろう)

1947年岩手県生まれ。東京大学法学部卒業、博士(法学)。現在一橋大学名誉教授、早稲田大学客員教授。専門は政治学・現代史。著書に『象徴天皇制の起源』(平凡社)、『ワイマール期ベルリンの日本人』(岩波書店)など多数。

長元 朝浩 (ながもと ともひろ)

1950年那覇市生まれ。1974年沖縄タイムス入社。学芸部長、編集局長、取締役論説委員長などを経て現在、専任論説委員。戦後50年企画のなかで国場幸太郎を取り上げ、紹介した(1995年4月2日~13日、計9回掲載)。

富山 一郎 (とみやま いちろう)

1957年京都市生まれ。同志社大学グローバル・スタディーズ研究科教授。著書『近代日本社会と「沖縄人」』、『増補 戦場の記憶』、『暴力の子感——伊波普猷における危機の問題』、『流着の思想——「沖縄問題」の系譜学』。

### 画像出典

- カバー、表紙、第I部伊江島陳情団写真=阿波根昌鴻『写真記録 人間の住んでいる島』
- 本扉 沖縄県民大会写真=武安弘毅撮影
- 第I部扉=沖縄県公文書館所蔵
- 本文103・182(裏表紙も)・192頁=松島朝義・作「つちのきれはし」(「うく・ゆれる」「つきぬける」「うち・そと」、久保田美生・撮影加工